



## やはり全国学力テストは 中止しかない！

7月31日、文科省は、今年4月に行われた全国学力テストの結果を公表しました。「国語、算数・数学も知識活用型問題が苦手な点は改善しなかった。全体的に正答率の低い地域と全国平均との差は小さく、学力の底上げ傾向が続いている」(中日新聞8・1)などという例年通りの結果でした。主に小学校の結果とテスト問題の検討を通して、全国学力テストの問題点について考えてみたいと思います。

## 0.5問にも 満たない差

「愛知・・・が小学生の全科目で全国平均を下回った」(中日新聞)とされています。どの程度の差なのでしょう。

愛知県の小学校の結果(全国平均との差)

	平均正答率	平均正答数
国語A	-2.7%	-0.4問
国語B	-2.7%	-0.2問
算数A	-2.5%	-0.4問
算数B	-1.5%	-0.1問
理科	-2.3%	-0.2問

## 学力を正確に 把握した数値か

ここで、公表される平均正答率や平均正答率は、果たして学力を正確に把握した数値なのかについて、小学校の国語問題をを通して考えてみます。

まず、国語Aは12問、国語Bは8問と問題数がとも少なくなっています。国語Aでは、12問中11問が選択式です。選択式では、正しく理解して正答となったのか、当てずっぽうで選んで「正答」とな

ったのか判断できません。問題数が少ない上に、そのほとんどすべてが選択式では、学力を正確に把握することは難しいと考えられます。

国語Bでは、8問中5問が選択式です。残りの3問は、記述式です。なお、記述式の難しい問題も選択式の易しい問題も、同じ1点となります。さらに、選択式でまぐれで「正答」とみなされたときも、1点と評価されます。選択式の多用と不公平な配点が重なって、数値が不正確となります。

このように、学力を正確に把握した数値ではないにもかかわらず、公表されることで比較が行われ、競争に巻き込まれてしまうのです。

## 高度な情報処理 能力を求める

では、全国学力テストで、どんな学力を把握しようとしているのでしょうか。小学校国語の問題から次の3点について考えてみたいと思います。

① 初めに目にする長文の問題・設問を読み解かなければなりません。とくに、B問題では、問題文が1つだけでなく、いくつにも分かれていることがあります。設問の意図を理解し、問題用紙をめぐってさかのぼり、該当する箇所を見つけて解答することが求められます。

② すべての問題が、架空の6年生「○○さん」で始まっています。設問でも、架空の「○○さん」が考えたことを見つけたらまとめたりするものが多くあ

ります。子どもが自分で考えたことではなく、「○○さん」の考えを推測して答えることとなります。(例：国語A 4番 裏面参照)

③ 国語Bの記述式問題は、すべて、「○字以上、○字以内」にまとめて書くこと」など3つの条件に合うように書くことを求められます。たとえ答えの内容が合っていても、答え方の条件の1つに外れるだけで誤答とされます。

これら3つの困難さに加え、テスト時間が足りないという問題があります。テスト後の子どもへのアンケートでは、「時間がやや足りない」と「時間が全く足りない」を合わせて、国語Aでは19.7%、国語Bでは24.9%ありました(いずれも全国の数値)。

結局、「いかに早く長文を読み解き設問の意図を理解することができるか」また「どれだけ短時間に該当箇所を探して解答することができるか」が問われることとなります。

じっくりと考えることよりも、素早く選択肢の1つを選んだり、条件に合った文章にまとめたりすることが求められるのです。

文科省は、大企業や財界が求めている「高度な情報処理ができる一部のエリート」を育成するための教育を強めようとしていると考えられます。

小学校や中学校は義務教育であり、全ての子どもが確かな学力を身につけられるようにすることを目的にしています。

一部のエリートを育成するためのゆがんだ教育にしてしまっているのではないのでしょうか。

# 全国学力テストは中止に!

全国学力テストの実施要領では、「調査結果の公表に際しては、・・・序列化や過度な競争が生じないようにするなど教育上の効果や影響等に十分配慮することが重要である」となっています。

ところが、文科省が、都道府県別の成績を公表するだけで、「最下位を抜け出せ」「全国平均を上回れ」「トップレベルを維持しろ」というような競争が全国に広がってしまった。その結果、「4月前後になると、例えば、調査実施前に授業時間を使って集中的に過去の調査問題を練習させ、本来実施すべき学習が十分できない」(文科省通知2016・4より)というような深刻な状況まで起きました。

さる8月2日、大阪市の吉村市長は、大阪市が、政令指定都市で最下位になったことを受け、全国学力テストの結果を教員のボーナスや学校予算に反映する方針を表明しました。それに対して、教育関係者や市民から反対の声があがっています。

このような事態になった原因は、根本的には、文科省が、都道府県に加えて政令指定都市の結果まで公表するようになったところにあります。

競争をあまり、子どもを苦しめ、学校教育をゆがめる全国学力テストは、中止以外に解決の方法はありません。

## 登場人物の心情を 情景描写から捉える問題?

### ～小学校国語A 4番の問題～

出題の趣旨は「登場人物の心情について、情景描写を基に捉えることができるかどうかをみる」です。

4

中西さんは、武鹿悦子さんが書いた『くらやみの物語』を読み、心に残ったことについて説明することにしました。次の【物語の一部】をよく読んで、あとの(問い)に答えましょう。

#### 【物語の一部】

■物語のこれまでのあらすじ  
五年生の夏休みの終わりに、コウタは、カクロウをふくめた塾の仲間と花火大会を計画していた。お金を出し合って買った花火は、コウタの家の物置に入っていた。しかし、その花火は計画の当日にコウタの母親に見つかり、水につけられてしまう。コウタは、そのことをカクロウに伝え、カクロウと自転車で仲間のもとに向かい、報告をする。そこでコウタは仲間の一人に厳しくせめられてしまう。

「気にするなよ。」  
と、カクロウはいった。

「のれよ。」

コウタは、くびをふった。

そうか、と行って、カクロウは、気がかりそうにふり向きながら遠ざかっていった。

(家になんか帰るもんか。)

コウタは、歩きだした。

(……だれもないところへ行くんだ。)

家なみが切れて山道にかかると、カナカナと、草むらの虫の声が、はりさけそうにひびいてきた。

草がそよぎをとめ、草の穂波の向うに沈む夕日が、あたり一面を火の海にしている。

正面から夕日にむかうとき、コウタは、目をほそめ小手をかざして歩いた。

セミ採りに一、二度きたことのある小さいトンネルが見えてくると、コウタは、かけこんでいって思いっきり声でさけんだ。

(問い) 中西さんは、特に心に残った文として――部を取り上げ、その理由について説明しようと考えています。理由として最も適切だと考えられるものを、次の1から4

までの中から一つ選んで、その番号を書きましょう。

- 1 登場人物の行動から、コウタのあわてている様子が伝わってくるから。
- 2 景色や様子を表す表現から、コウタのいかりやくやしさが伝わってくるから。
- 3 音を表す表現から、山の静けさと海の激しさが伝わってくるから。
- 4 登場人物の会話から、おたがいを思う気持ちが伝わってくるから。

※正答は「2 景色や様子を表す表現から、コウタのいかりやくやしさが伝わってくる」(全国の平均正答率 74.1%)

この問題は、「情景描写から登場人物の心情を捉える」問題ですが、以下の疑問点が感じられます。

ア 「景色や様子を表す表現」の文を見ただけで「コウタのいかりやくやしさ」について考えなくても2を選択できる。

イ 「コウタのいかりやくやしさが伝わってくる」に疑問を感じても、自分の考えを脇に置いて、2を選ぶことになる。

この問題が正答だったことで、「登場人物の心情を情景描写を基に捉えることができた」と評価できるか疑問だと言えます。